

館病院百二十年史にある。その後中絶再興の経緯があり、後には医学講習所となったが、勅令第四十八条で廃校となった。

明治二十年には公立医学校は十八校となっており、勅令がなくとも淘汰されたであろう。

(日大医学部公衆衛生学教室)

## 昭和十年改正の算術教育変更方針 とその後の初等・中等・数学・理科教育の改革ならびに大学・理科教育改正との関連性について

柴田 幸雄

小倉金之助先生の「数学教育の根本問題」の最初に次のようなコトバが記されている。一つはケーリーのコトバで「あらゆる数学の中で、あの驚嘆すべきユークリッドの比喩論ほど壮麗なものを多く見たことがない」であり、もう一つはペリーのコトバで、「私はユークリッドの比喩論のために、我が生涯の貴重な時を多く失った」とあたかも価値観のちがう二つのコトバをみることができる。小倉氏が常に唱えてこられた実用数学の重要性がここにもうすでに表われているように思え、また現今大学における教養課程での自然科学教育（勿論ここに数学も含まれる）と専門課程

における教育との問題点でもあらうと思われる。日本における尋常小学校の数学教育いわゆる算術は昭和十年、今までの黒表紙から青表紙に変わり、カラフルでもあり、四つ珠ソロバンでの珠算が加えられたのもこの教科書からである。これは小倉氏が従来から唱えてこられた実用数学を重んずる一面でもあり、また満州事変・上海事変そして支那事変・大東亜戦争へと移る戦時教育の一端でもあったことは見方によれば皮肉とも思える事実であらう。これはまたキリスト教教育としてユニークな教育をはじめた新島襄の同志社における工業専門学校の出發が国策とともににはじまったのとよく似た面をもっている。(これは以前本学会でものべた荒木寅三郎・橋田邦彦先生『正法眼蔵積意』の著者一の戦時中教育への関与と関係あるところである)この昭和十年発刊の算術教科書は一応の目的を終え昭和十五年(紀元二千六百年)六冊を終えるわけであるが昭和十六年から実施された国民学校初等科教育数学にとってかわり、その幕を閉じてしまうのである。昭和十六年一月八日文部省からの学校新体制に関する示達があり、四月には教科書五種選定制に、そして十八年から中等学校も国定教科書に移る。すなわち

今迄の代数は数学1類、幾何は数学2類へと移り、理科における博物学は消え、動物学、植物学は生物に、物理学、化学は物象1類2類へとそれぞれ移行する。しかしここにも実用的な面への移行は続けられ、特に化学(物象・2類)をみると実験観察を主とする方針は貫かれている。しかし残念なことには相続く学徒動員や空襲のため、ほとんどその目的を達成することなく終戦を迎えたことは誠に無念というほかはない。元来日本の数学教育をみると、その範は米国にあり、英国のシムソンがユークリッド幾何学原本を改訂、初等幾何学(一七五六年)をあらわし、これが英国幾何教育の運命を握るのであるが、このものがすなわち日本の幾何教育になってきたものといえよう。しかしこの根底にはフランス学派の幾何学もひそかに流れており、ここにデカルトから発した自然学的幾何学の流れがその一面をになうこととなる。すなわちユークリッドの如き幾何と算術代数をまったく無関係とするのに対し、フランスのルジャンドルのように多少融合主義をとってくるのである。

(これはデカルトが現在解析幾何学の祖といわれるのと一致した考え方といえよう)他方代数をみると英国派はウッドハウ

ス、ピーコック、ドモルガン等のケンブリッジ学派による代数論理学が主であり、チャールス・ダーウィンがいったという「私は数学をやるかと企てました……けれども代数の初めの方をやって何等の意味も見出し得ませんでしたから、それが主な原因となって数学をやるのが嫌になりました」といわしめるもとなつたのである。これらをもととして小倉氏も「応用上および自然科学上より見たる数学」という項目の下に実用数学なるものを説明し、(一)実用解析学、(数值計算、図計算、機械計算) (二)実用幾何学(画法幾何学、図式力学、測量、地図製作法) (三)公算(確率)論、誤差論、(四)保険数学、(五)統計数学、(六)理財学(商業数学)(七)数理経済学 をあげている。これらをみる時、先の学会でも報告してきたが生化学という一面を眺めても純理論的な面と実用的な面とが考えられ新しい意味における医化学を強調してきた。これこそデカルトが「ラ・フレーシユ学院」を出て将来の学問に愛想をつかした面とも符合するものがあるうと思う。

〔文献〕

(一) 目で見える教育のあゆみ 文部省 昭四二

(一) 台湾文教史略 李汝和 台湾省文献委員会 中華民國六一年

(二) 小倉金之助著作集 勁草書房 一九七三

(三) 大阪府立北野高等学校 創立一一〇周年 一九八三

(四) 生理学的世界像 浦本政三郎 理想社 昭一六

(五) 思想の歴史⑦ 澤田又夫(市民社会の成立) 平凡社 昭四〇

(六) 力学的世界の創造 吉仲正和 中公新書 昭五四

(七) 日本の化学 百年のあゆみ 井本稔 日本化学会 化学同人 一九七八

(八) 日本の数学百年史 編集委員会 昭五八

(九) 明治前 日本数学史 日本学士院

(十) 日本数学教育史 松原元一 風間書房 昭五八

(十一) (愛知医科大学学生化学)